009　遠野物語-Ⅲ　040219
◎一月に“女のお化け”の話、“河童”の話、を載せましたが、今回は“ザシキワラシ”の話です。
◎ザシキワラシ：北上山地（岩手県-遠野のあるあたり）を中心として信じられている旧家に棲むという精霊。顔の色は赤く、座敷に出没する。野山の精霊説や巫女によって天から呼び寄せられた護法童子の説がある。南方熊楠は、人柱として家の土台に男女の子供を埋め、その霊をその家の主にしたことがザシキワラシの由来であると言っている。ザシクワラシが棲んでいる家は栄えると信じられています。ザシクワラシがいなくなるとその家は没落するという話が数多くあります。

◎旧家には、ザシキワラシという神様がお棲みになることがあり、その数も少なくありません。ザシキワラシの多くは、十二、三歳の童子で、時たま姿を見せることがあります。先日も土淵村大字飯豊の今淵勘十郎という家でザシキワラシが姿を見せました。高等女学校で学んでいる娘が、学校の休みで帰っていた時、なにげなく廊下を出たところで、ぱったりとザシキワラシに生き会い、たいへんびっくりしたことがあります。その時のザシキワラシは、間違いなく男の子でした。

◎また同じ村の佐々木の家でも、そんな話がありました。母親が一人で縫物をしていますと、次の間でガサガサという聞きなれない音がしました。この部屋は家の主人の部屋で、その時はちょうど東京に出かけて留守でしたから、誰もいるはずがありません。おかしいと思い母親は、そおっと板戸を開いてみましたが、人影もなくあたりは静かでした。しばらく縫物を続けていましたが、今度またしきりに鼻を鳴らす音が聞こえてきました。それで母親も、「やはり　ザシキワラシ　だ」と合点しました。この家にザシキワラシが棲みついていることはかなり以前から村の人のうわさになっていたからです。

◎ザシキワラシが女の子のこともあります。土淵村の旧家で山口孫左衛門という家には、女の子のザシキワラシが二人おられると、昔から言い伝えられてきました。ある年の秋のころ、同じ村の何某という男が町から帰ってきました。夕陽が西の山の端を赤く染めはじめたころ、留場の橋のあたりまで来て、ほっと一息つきました。あとひとつの橋を越えれば家に着きます。その時、今まで見かけたことのない二人連れの娘に会いました。背はそれほど高くはありませんが、きれいな黒い髪におそろいの赤い着物をつけ、目の澄みきったとても可愛い娘たちでした。二人とも何か考えるように、うつむき加減にこっちにやってきました。「おめだち　どっから　きたべ」男が思い切って声をかけますと、娘二人は、はっと驚いたようでしたが、「おら　山口の　孫左衛門の　家からきたどこだす」男は重ねて、「これがら　どごさ　行ぐどごで　がんす」とたずねますと娘たちは、「ある村の　何某の家さ　行ぐごどに　決めんした」と答えました。その何某の家というのは、ここから少し離れた村にあります。今でも立派な暮らしをしている長者です。男は、「ああ　これは　ザシキワラシだな　ザシキワラシに出られては　孫左衛門の家も　終わりだな」と思いましたが、誰にも言いませんでした。それから何日経ったでしょうか、孫左衛門の家では、主従二十数人がキノコの毒に当たって、わずか一日で死に絶えてしまったのです。やっと七歳の女の子が一人残りましたが、その女の子も年をとっても子供がなく、先年病気で亡くなりました。

◎旧家の長者、山口孫左衛門の家が没落したのはこんな話があります。ある日のこと、裏の大きな梨の木のまわりに、今まで見たことがないキノコがたくさん生え、みんなをびっくりさせました。いかにもおいしそうなキノコなので、それを見つけた下男たちが言いあいました。「うまそうだがら　食べてみるべし」「いや　美しいきのこには毒があるもんだ」孫左衛門が、「見たことがないきのこは　食べない方がいい」下男の一人が、「どんなきのこも　おがらで（皮を剥ぎ取った麻の茎）　よくよくかき回せば　けっして毒には　あたることはねえもんだ」みんなはこの下男の言葉を信じ込みきのこを食べてしまったのです。
◎この毒きのこはドクツルタケとされています。コレラのような症状を起こし、死に至る。

010　遠野物語-Ⅳ　050219
◎“ザシキワラシ”の次、今回はオオカミ（ニホンオオカミ）の話。
◎1905 年（明治 38 年）奈良県で生存を確認されたのが最後。昔はヤマイヌと呼ばれていた。エゾオオカミより小さく、体重 15 キロぐらい。主にシカを獲物としていたが、犬や馬を襲うこともあった。
◎柳田国男説：送り狼とは人のあとからつけてくる狼と言って怖れられるが、人を害するためについてくるのではない、という言い伝えの方が多い。家に着けば暗闇に向かって感謝の意を述べる、それを怠ると、一晩中家の周りを吼えまわって悪戯して帰る。
◎柳田国男説：人がオオカミと争うようになったのは近世以降としています。オオカミのえさ場が侵されたことや狂犬病の発生があげられます。明治政府や県は懸賞金まで出して、オオカミ退治を奨励した。

◎駄賃付けをおそう狼（馬による運送業：馬借・馬子）：境木峠と和山峠との間で、駄賃馬を追う人たちが、たびたび狼に出会ったものです。馬方が夜間に行動するときは、たいてい十人ぐらいで仲間を作ります。一人が引く馬は四、五頭なので、馬の数は四、五十頭になっています。ある時、駄賃付けの集団が、二、三百匹ほどの狼に追われたことがあります。（二、三百匹は大げさで、恐怖がそう言わせた・・）その足音は山も鳴り響くほどでした。あまりの恐ろしさに馬も人も一か所に集まりました。「火をどんどん燃やせ」「木をもってこう　枯れだどこな」火を焚いて狼を防ぎましたが、馬の背を飛び越えて入ってくる猛々しい狼もいます。これという良策も思いつかないまま、とにかく、馬の綱をみんな解いてこれを集め、まわりを張り巡らしました。ところがどうでしょう、狼は罠ではないかと思ったのでしょうか、そのあとは、馬の輪の中に飛び込んでくる狼は一匹もありません。それでも狼は、遠くから取り囲んだまま、世の明けるまで吼え続け、駄賃付の人たちは一晩中火を焚き続けたということです。

◎誇り高き御犬：小友村、旧家の某爺様、町からの帰り、峠を越えれば我が家がそこだと思うと幸せな気分になった。「ウオオーウオー」狼が吼えました。爺様は一杯気分なのでいつもより気が大きくなっていました。狼の野郎めとからかい半分に、「ウオオーウオー」と吼えてみました。なかなか上手にできたと満足した途端、爺様の声にこたえるように、「ウオオーウオー」その狼の声に、爺様は飛び上がるほどびっくりしました。恐ろしくなって早足で峠を下りました。気のせいか誰かが後ろからつけてくるようです。「ウーウー」低い狼の唸り声です。爺様は酒の酔いもいっぺんに冷め、飛ぶように家へ戻りました。「早く門を閉めろ」と家のものに命じ、出入口を固め、灯を消し、息をひそめ、びくびく一夜を過ごしました。狼たちは一晩中、家の周りをうろつき、「ウオオーウオー」と吼える声がやむことがありません。やっと夜が明け、さすがの狼たちも山へ帰ったようです。家の者たちは、ほっとしておそるおそる外へ出て見てびっくりしました。狼は家の土台の下を掘って穴をあけ、馬屋の中に入り込み、七頭いた馬を残らず食い尽くしていました。そのころからこの家は、身代が次第に傾き始めた。

◎佐々木君が幼いころ、祖父と二人で山から帰ってきたところ、大きな鹿が倒れているのを見つけました。近寄ると、横腹が食い破られ、そこからまだ湯気がたっています。「これは　御犬が食ったもんだな」祖父はつぶやき、「あの立派な毛皮を　ほしいどもな　御犬は必ず　近くで　オレたちのことを　見張っているもんだ　だがら　こういう時は　取られねえもんだ　さっ行ぐべす」祖父は早口で語り、その場をさっさと離れました。

◎山を去る狼：和野の佐々木嘉兵衛という人が、ある年、境木越えの大谷地へ狩りに行きました。大谷地はとても広い高原です。秋も終わり木の葉はみな散ってしまい、山はかくれる所もないほど一帯が見渡せました。目を凝らすとずっと向こうの峰から何百匹とも知れない狼の群れが、こっちに向かって走ってきます。嘉兵衛は恐ろしくてただおろおろしてしまいました。気を取り直し、そばの大木によじ登りました。狼たちは木の下をものすごい足音を響かせて北を目差して去っていきました。遠野の野山の狼がそのころから減っていきました。

011　遠野物語-Ⅴ　080219
◎5 本もこの話を題材に書きましたが、一応これで終わりのつもりですが、どうなりますやら。ここに書かれている話は今でこそ、「そんな馬鹿な　そんなことがあったのか　笑っちゃうよね」という話。しかし当時、真剣に話され行われていた、これがたった百年前の日本の姿だったとは、懐かしくも嬉しい限りです。
◎農商務省の官僚だった柳田国男が仕事で地方を訪れ、地方の人々と会い、見聞きして、昔から伝承されている話や行事、その地方に残っている不思議なものに衝撃を受け、調べていった。明治 41 年（1908）遠野の土淵村出身の佐々木喜善と知りあい、彼の話を取材源に、遠野物語の執筆を始めた。天狗、妖怪、信仰の話、山に住む異人、金山師。駄賃付け（馬の運送業）、山伏、旅芸人、薬売りなどの外部からの旅人も往来していた。
◎当時の遠野は、岩手県の真ん中あたり、太平洋まで 20 キロぐらいの位置。
◎明治 42 年柳田は待望の遠野に向かいます。上野駅から花巻へ、そのあと駅馬車（実際は人力車）に揺られ、遠野に入った。遠野は遠野南部家の城下町、北上川と三陸海岸を結ぶ交通の要所で賑わっていた。盛岡の南部本家に対抗して、文化、学問も盛んで、小京都とも言われた。
◎明治 40 年代、柳田は島崎藤村や田山花袋らと青春時代を共にし、遠野物語も文学として一石を投じた。民俗学の学者たちからおおいに尊敬される柳田国男の原点が文学だったとは驚きだけれど、民俗学の先生方は、文章が楽しくないのは確かだねえ。

◎前薬師の天狗：早池峰山（はやちねさん）の手前にある前薬師は、天狗が棲んでいるということで、人々は決してこの山には登りません。山口のハネトという人は、たいへんな無法者で、マサカリで草を刈り、カマで土を掘るなど、人と反対のことをして、若いころは乱暴が目立ちました。ある時、人と賭けをして、一人で前薬師に登りました。無事帰ってきた男の話では、頂上に大きな岩があり、岩の上に大男が三人いました。彼らの前にはたくさんの金銀が広げてあり、この男が近づくのを見て、怒った顔で振り返った三人の目の光が、とても恐ろしかったと言います。この男、やっとの思いで、「早池峰山さ　登りさきたども　道に迷って　こごさ　きてしまった」と言い訳をしました。以外にも、「それならば　送ってやるがら」麓まで来たとき、「目ふさいで」きつく言われ、目を開けると、異人たちは、消えていました。
◎何某という男が、早池峰山に竹を切りに出かけました。竹が茂っている場所を見つけ、喜んで行ってみました。茂みの中で何者かがうなっているようです。男が怖いもの見たさで、そっと近づいてみますと、三尺（90 センチ）ばかりの竹草履が脱いであり、大男が大いびきをかいて寝ていました。
◎ひとさらい。遠野の郷に住む人で、異人にさらわれていく人が毎年多くありました。ことに女の子が多かった。
◎白望（しらみ）山の不思議。白望山にきのこを取に行って、山中に野宿する人たちが、真夜中に森の中がぼおっと明るくなることがあります。また誰もいないはずの深い谷の向こうで、「カーン　カーン」木を切り倒すものすごい音や、山歌をうたうよくひびく声などを聞くことがあります。五月に萱を刈りに行ったときなど、ずっと遠くの方に、桐の花が今を盛りと咲いている山を見ることがあります。ちょうど紫の雲が幾重にもたなびいているように見え、それは見事です。しかしその美しさに魅かれ、紫色の花を求めて、多くの人が山に入りましたが、ついに誰一人、その桐の大木を見つけた人はありません。そういえば、白望の山奥で金の樋と金の柄杓を見つけ、大喜びした人がいました。早速持ち帰ろうとしましたが、とても重くてびくともしません。それではと、カマで削り取ろうとしましたが、歯がこぼれるだけです。次の日、何人かの人々と一緒に探し回りましたが、一日中探しても見つけることができませんでした。

◎全国に分布する天狗像は、修験道の山伏たちの姿と重なり合う場合が多い。
◎異人とは天狗と同様、修験道の山伏たちか、白子と言われる西洋人か、砂金や砂鉄の金山師などではないか。
◎大男。日本全国に大男・大入道・巨人伝説が分布しているが、産鉄族の名残と言われています。
◎樋や柄杓は、採金道具です。実際に白見（白望）山には、昭和 17 年まで 1 キロほど金山坑道がありました。

012　ポンポン山　130219
◎家の近所、神峰山寺の奥、ポンポン山に登ろうとしている。昨日までは、台高の三峰山に登る予定だったが、欠席が相次ぎ、「それでは近所の　ポンポン山で　お茶を濁しますか」ということになった。前日までは朝 7 時集合の予定だったが時間を変え 9 時に出発した。
◎2.3 日前から気象台が言うには、最大の寒波襲来とおおいに騒がれた。確かに寒い、本当に厳しい、と思いつつ、一枚多めに着込み普段通りに過ごしていた。台高にしろ、比良にしろ、積雪はあるだろうけど登れないことはない、登りたいと思っていた。友人が、「発見が遅れるから　ひとりで山に入ったら　あかんぞ」という。比良や台高ぐらいなら一人で入っても大丈夫だろうと思うが、ひと月ふた月の山から遠ざかり、「大丈夫と大丈夫じゃないのでは」の二つがないまぜになり、引きこもっている寒さが身に沁み、気持ちが山から遠ざかっていくのはなかなか残念なことだ。
◎高槻市内から上ノ口方面行きの坂を登ると峠がある。そのあたりから山の方が見える、「あれれ　雪がない」と驚いた。冬に何度か来たけれど、この峠を境にうっすら白い雪の世界に入っていくものと思っていたが、雪がない。最大の寒波は東北・北海道だけのものなのか、神峰山寺に入ってもポカリ陽気の穏やかな風が吹いている。そういえば例年の雪かきに行く場所、金沢から 10 キロほど富山県に入ったところも雪がすくないらしい。
◎やかましい音、なんの音。「自衛隊のヘリだねえ」ま上を飛んでいる、「どこに行くのかねえ」30 分ぐらい歩くと雪がうっすら残っている。陽が差すと、ぽかぽか暖かいが、ほとんどが曇り空、冷たい風、ひやりとした空気。先ほど歩き出してすぐに、上着、帽子、手袋をザックにしまったが冷たい風に耳が痛い。次の休憩で帽子をかぶろう、ついでにおにぎりを食おう、のどは乾かない、めずらしいことに水を飲まない。
◎去年のことを調べると、9/11 にポンポン山に登っている。その一週間ぐらいに前に、強烈台風がやってきて木をなぎ倒し道をふさぎ、無残な山の姿に唖然とした。動物の鳴き声かと聞き耳を立てたが、どうもチェーンソウの音のようで、遠いところで響いている。進んでいくと、若いアンちゃんが登山道をふさいでいる倒木を切っていた。寺に大阪府の軽トラックが止まっていたが、登山道の整備をしてくれているようだ。半年近くたった今、谷筋の倒木はまだほったらかし状態だが、登山道はほぼ普通に歩ける、感謝である。
◎高槻の市街地から 5 キロ 10 キロ山の中に入っただけだけれど、緑に包まれ、でかい木がにょきり、自然林があり、針葉樹の植林があり、鳥が舞い、冷たい風が通り抜ける。このあたりは都会の喧騒とは程遠い山の中、モミやミズナラの大木、50 年前に炭を焼くために伐られた後、にょきにょきたくさんの幹が育っている。シカが食ったのか下草はない、シカめが根こそぎ食っているようだ。ミズナラの木にはビニールが巻かれている。「ナラ枯れ実験中」という立札を何年も前からいろんな山で見つけているが、ナラやら松やらが虫にやられて枯れていくようだ。
◎もうすぐ本山寺に帰ってきたなというあたりで、ちょっとのどが渇いた、水が飲みたいと思った。今日は水分補給をしていない、いかに低い山、簡単なハイキングだとはいえ 4.5 時間歩いているのに、てっぺんでいただいたコーヒーだけとは驚き、いつもの水飲み男がどうなったと思いつつ、ごくりとお茶を飲みこんだ。
◎ちょっと寄り道させてくださいと、谷の方へ一人で歩いた。去年の台風のあとの帰り道、倒木を避け下の方に下がりすぎたところにかすかな登山道、これでも行けるかなと歩き出したが、しばらく行くと踏み跡が怪しくなってきた。同道していたＭさんがスマホの地図を出し、この道もなんとか寺の方に行けそうというので、藪漕ぎ、草の中、斜面を下って何とか道を見つけた。その時の道を今、逆向きに探検である。おっとと、というような斜面を横切り生い茂った自然林の中を歩く。枯れた太い幹の側面に白いきのこが上から下までびっしり生えている。黒く見える枯れた幹に白いきのこが美しい。キノコや菌は植物遺体の掃除屋さん、立ちながら枯れている幹の中心部にきのこの本体が縦横無尽に食い込んで、旨い美味いと食っているのかね、顔を出した白いきのこ君は菌糸君の子造り器官＜子実体＞だと書いてあったね。
◎急な斜面をちょっと下ったところに鳥の巣箱が 2 つ 3 つ結び付けてあった。緑色に塗られた木の巣箱がひもで結び付けられている。どなたが入っているのか、鳥の気配は感じなかった。

013　鬼-Ⅰ　230219
若尾五雄著＜鬼伝説の研究-金工史の視点から＞この本は前にも読んだと記憶があるが、また改めて読んでいる。この先生、本業は産婦人科医だそうだが、忙しい傍ら民俗学の研究をしている。この項では金属生産の話が中心になっている。先生、各地を旅して歩き回り、現場取材で調査の途中に、「“金”という字はないか　金という字が付いた場所なり　神社なりは　ないか」と尋ね歩き、「金と意地が付く場所に　鉱山や　坑道はないか　鉄の仕事をしていたところはないか」捜し歩いておられる。地元の人たちが、「そんな話は聞いたことがない」と答えが返ってきてもあきらめずにたずね歩き、「やはりあるじゃないか　鉱山や　鉄滓が」というような話をされている。オレも長らく、「日本の　古代　近代の鉄は　どこでどうやって　造られていたのだ」と怪しんでいたが、先日“里山”という本を読んで目からうろこが、というようにやっとわかった次第。そのわかったことをここで紹介しましょう。

現代でこそ、明治のころＥＵから入ってきた技術で、輸入された鉄鉱石と石炭を大きな溶鉱炉に入れ、大量の鉄が造られるようになった。鉄の含有量が高い、赤錆色をした鉱石、それと真っ黒な石炭、それらが海のそばの工場に積まれベルトコンベヤーで運ばれているのを何度も見た。大阪周辺には鉄をはじめ銅やらアルミやらを生産する大工場があちこちにあった。

大工場で生産される以前、それまでは花崗岩が多い中国地方の川は、花崗岩の砂が流れている。その砂には鉄が多く含まれているので砂鉄と呼ばれる。山の木を炭にしたものと砂鉄を小さい炉に入れ、小さいとはいえ小ぶりの銭湯ぐらいかな、そんな炉を粘土で作り三日四日と燃やし続ける、大きなふいごで空気を送る、人力でたたらを踏んで送風すると炉の中が高温になり鉄が造れる。簡単に鉄が造れるとはいえ、原料探し、原料加工、炉制作、燃料探し、炉内作業工程、出来上がった鉄の塊を製品にしていく作業、ざっと素人のオレが疑問に思うことを並べてみても、いくつもの作業工程が浮かんでくる、いくつもの作業工程のどれ一つとっても、それではどうする、なにひとつ作業の具体性が浮かばない、そういう未知の世界。ただ千年の歴史の中でたくさんの金属製品が遺跡との中に残っている。隣の先進国から輸入されたものも含めて、だれかがどこかで金属製品を造っていたのは紛れもない事実。この先生のように、「なんでも金属に結び付けて・・」と危ぶむ反面、農業がずっと主役の産業だった日本で、農作業が、稲作が、営々と毎年続けられていたのと並行して、これだけのたくさんの雑多な金属製品が、人の手によって同じように営々と毎年続けられていたにちがいない、「“金”という字はないか　金という字が付いた場所なり　神社なりはないか」という先生の話、「ちょっとこだわり過ぎでは」疑問視していたが、一概に危ぶむ話ではなく、あちこちで、農作業と同じように、日々営々と、金属生産の仕事が普通に行われていたのやもと思うようになった。農業中心の日本だったけれど、農作業以外の作業がないわけではない、在ってしかるべき、なければ人は生きていけない、ということだねえ。ただ、「農業が一番の仕事」と言われた日本では、農業以外の仕事従事者は、鬼やら、ひょっとこやら、怖いものであり差別の対象であったのかもしれない。

◎桃太郎：桃太郎の鬼退治の話は諸国に伝わっているらしいが、吉備団子の関係から岡山県の吉備国にはっきりした伝説が伝わっている。今まで考えられていたように悪人としての鬼が、宝物を盗んで貯めていたのを桃太郎が取りに行くというのではなく、鬼の棲むところには、金、銀、銅、珠玉、などがあったのでは。戦前は教科書にも載っていたが、敗戦後アメリカ側から、民話の侵略的意図が日本の軍国主義を鼓吹するものであるとし、戦後一時桃太郎の民話は抹殺された。
◎備中誌：昔、阿曾郷の鬼ヶ城に温羅（うら）という鬼が棲んでいて付近を荒らしまわっていた。吉備津彦尊はこの鬼を退治した。鬼はなかなか強かったが遂に捕えられ吉備津神社に埋められた。神社の釜鳴神事で釜の鳴る音は温羅の叫び声だという。釜鳴神事は阿曾村の巫女が代々続けてきた。巫女は、温羅の妻が阿曾村生まれであったからだという。鬼ヶ城から赤い水の血吸川が流れている、温羅の血だと言われている。
◎真金吹く　きびの中山　帯にせる　細谷川の　音のさやけさ
◎宮城県に残る文献で、永禄年中 1560 年ごろ、備中国の中山から二人の人を招き、砂鉄精錬を始めた。

014　鬼-Ⅱ　240219
◎酒呑童子：伝説では大江山に住む鬼の酒呑童子が、夜なよな都に現れ、姫をさらい、財宝を強奪していた。一条天皇が討伐令を出し、源頼光が鬼退治を成し遂げた。
◎先生：大江山には鉱山はないか、酒呑童子の鬼は鉱夫ではなかったか、を調べた。
◎金工長者、炭焼長者の屋敷が日本のいたるところにあった。やんごとなき（没落貴族）京都に住む姫君が、こういった長者屋敷に嫁いでくる、「ああいいところに来た」というものもあれば、都を懐かしみ悲嘆にくれる姫君もいた。簡単にこう言ってしまうと、「そう　人間には　ふたとおりあるね」と答えがでがちだが、こういう問題も含め、もっと多岐にわたり考え推察する習慣をつけたいものだ。
◎大江山の鬼が茶屋の付近に藤原という名家がある。この家の先祖は藤原氏の出身の姫君であり、その夫は酒呑童子であると伝えられている。村の人も名家であると尊敬している。

◎茨木童子：酒呑童子のもっと重要な家来であった茨木童子は京都を荒らしまわった。出生地は茨木市水尾と言われている。水尾はオレの住まいするところ、半世紀前までは阪急茨木駅付近に住宅が 30 軒ぐらい、あとは向こうの方まで水田が続く田舎であった。それがどんどん住宅が増え、今ではかつての大阪市より雑多な大都会の感がある。
◎茨木の伝承：十六カ月の難産の末生まれた茨木童子は、すでに歯が生えすぐに歩きだした。床屋夫妻の子として育ったが、かみそりで客の顔を傷つけてしまい、床屋に叱られ、近くの小川でうつむいていると、川面に映る自分の顔がすっかり鬼になってしまっているのに気づき、床屋には帰らず丹波の方に行ってしまった。そこで酒呑童子と遭遇する。酒呑童子が源頼光に討たれたが、茨木童子だけは逃げ延びた。
◎先生：茨木には弥生時代の鋳型とふいごが発掘された。東奈良遺跡（オレの住まいから 2 キロ東なり）50 年前の大阪万博のころに発掘された。弥生時代の大型建物や高床式倉庫があり、日本最大級の銅鐸工場、銅製品工場があり、各地に銅鐸を配布していた。沢良宜（さわらぎ）とは、サワラ＝銅器。今もこの地名はある。皇室の最初の仕事は金工ではないのか、と先生。

◎修験：山伏は深山幽谷でなければというのは一面だけで、小さい山にも修験者のいた話が多く残っている。山伏は鉱山地帯こそ最も好むところで、鉱山採掘だけを目的にしたものでなくとも、山伏は小さい山にもいた。もちろん、金、銀、七宝、これらはあらゆる人々の欲望の対象であった。古墳を発掘したときの埋葬者のキンピカの飾りつけ、これは豊かさ、冨の、願望象徴ということはわかるのだけれど、寺院建築のあのキンピカは、ありがたい桃源郷という意味だけなんだろうか。
◎ひょっとこ：昔、ひょっとこと言えば、オカメと並んで、素朴な農夫であるとか、海に潜ってでてきた潮吹き顔ともいわれていた。柳田国男は火男だといい、ほほを膨らませ口をとがらせ火を吹くときの顔だという。火を大規模に扱う鋳物師、たたら師、鍛冶師だという。
◎鍛冶屋は片目で片足だと諸国で伝承されている。何十年も炉内の火の色を監視し見続けた結果、片目がつぶれてしまう。たたらを踏むスタイルが，片足立ちに見えるのでは。

◎坂上田村麻呂と鬼：長山村（現岩手県雫石町）＜旅と伝説＞貧しい百姓がお礼参りに行った帰り、光るものを見つけ、それが黄金であった。それ以来その家は栄え蜻蛉長者と呼ばれた。修験道の道場は火山系の山の中にあるもので、経を読む仏教ばかりでなく、道教の行もあり物質文化も多くみられる。火山系の山には水銀をはじめ、金銀銅が産出される。
◎坂上田村という人あり。近江の国鈴鹿山の立烏帽子というところに化生の女あり。人を殺し、財宝を盗んだ。この女奥州の悪路王という鬼と契りをこめ池に住みけり。田村この者どもを退治ありことなり。鈴鹿にも、金銀銅マンガン鉄が算出していた。奈良の大仏建立にあたり奥州の黄金で、田村麻呂の活躍が記されている。

015　鬼-Ⅲ　250219
◎羽黒山の鬼（栃木県）：羽黒とは歯黒（鉄漿）のことで、鉱山師（修験者）は尊崇した神である。山形・栃木の両羽黒山は付近一帯が鉱山で、山自体が御神体であったのだろう。栃木の民話-羽黒山の鬼：羽黒山の麓関白村に新田という人の男の子が、美しくこのあたりのものとは思われなかった。老人から幼児まで恋い慕わないものがいません。多くの女人の執念もこもって、この男の子は成長するにつれ、見るも恐ろしい鬼の姿になってしまいました。心身ともに悪鬼となり、人殺し、家畜殺し、家を焼き、悪事の限りを尽くすようになった。宇都宮の殿さまがこれを取り押さえようしたが、反対に宇都宮の城に大きな石を投げつけられ、殿様もびっくりして時の天皇に申し上げました。京からの軍勢も歯が立ちませんでしたが、一計を案じたくさんの鶏に火のついたたいまつをくくりつけ追い上げました。やっと鬼退治が終わり、京からの武将の名をとって、関白村となった。

◎岩木山の鬼（青森県）：岩木山には鬼が棲んでいた。村の長者の娘をみそめ、長者に娘をくれるように頼んだ。困った長者は一計を案じ、「一晩のうちに　十腰の刀を鍛えたら　娘をやる」と約束した。すると鬼はあくる日に刀を持ってきたが、一本足りない。鬼はあきらめ山に逃げ帰った。ここの地名が“十腰内”となった。
◎上記の鬼は鍛冶屋という金工師だったのだろう。修験者のいたところである。この時の刀の一本が、巌鬼山神社に祀られ、近所に神社にも“玉はがね”がご神体とか、刀や鍬や鋤がご神体の神社もある。

◎土蜘蛛：土蜘蛛とは穴居民族か。土蜘蛛退治という話が出てくるが、山の民が持っていた宝物（金属類）を奪いに行ったのでは。

◎吉野の洞川には金峰山があり、修験道の鬼との関連が想像される。兵庫県の香住も修験者が霞を食って生きているというように、修験者を援助する地名で、砂鉄や黄金が採れる。常陸国鬼長、常陸国鬼越山、武蔵国鬼窪、下総國鬼越などの地名は金工を思わせる地名。
◎常陸国鬼越山の鬼の話：往古鬼族の棲みたる所とぞ。鬼族茨城童子これより起これるならん。
◎茨城県（常陸）、伊豆の茨城、大阪の茨木、金工を思わせる名前。

◎神岡鉱山（岐阜県）：元の起こりは、鬼ヶ城という山があり、越中から越してきた鉱山師が銀鉱を発見した。
◎武生の鬼ヶ岳（福井県）：水銀を含有する朱砂の産地。大伴家持の歌に、「丹生の山べ」が出ている。

◎戸隠山（長野県）：謡曲「紅葉狩」平繊茂（これもち）が鹿狩りの途中、高貴な女が紅葉を愛で宴を催していた。「ぜひご一緒に」平繊茂は誘われるままに酔いつぶれ寝てしまった。戸隠の鬼神だった女が繊茂に襲いかかったが、神剣を授かった繊茂が、鬼女を退治した。前半は華やかで妖艶な世界が後半では一変して、壮絶な戦いの場面が展開する。歌舞伎もある。明治時代まで、歌舞伎は能・狂言の真似ができなかったので昭和の作。
◎戸隠の鉄。滋賀県石山寺の隣に平津というところあり。戸隠の子孫が来て銅を生産していた。

◎京都　八瀬童子：京都に近く鬼の子孫がいるといわれるが、職業として葬儀に携わり、総髪鉄漿（おはぐろ）の異様をなし、代々童子と称していた。

◎広島県帝釈天：帝釈天は鬼を連れた四天王を従え、自身も善鬼神である。金銀銅鉄の囲まれた須弥山に住む。
◎宮崎県高千穂に住む鬼、喜八：高千穂神に追い回された鬼だが鉱床がある。
◎鬼界ヶ島:別名硫黄島、地獄の相を思わせる。俊寛僧都の流されたところ。

016　高島トレイル-Ⅰ　280219
◎「高島トレイル　黒河峠から乗鞍岳へ　行きましょう」、と言われ、行ったことがない山だけれどと検索したが、どこに車を止めるのやらわからぬままに出向き、帰ってきた今、あらためて地図とにらめっこ、山を満喫している。まずこのあたりは“在原”の地名、“在原業平”の墓があるという（晩年在原業平隠遁した地という伝説、これもわからないらしい）。父は平城天皇の子、母は桓武天皇の皇女という高貴身分、平安初期の歌人として知られる。伊勢物語の主人公として有名。
◎ちはやぶる　神代もきかず　竜田川　からくれなゐに　水くくるとは
◎名にし負はば　いざこと問はむ　都鳥　わが思う人は　ありやなしやと
◎朝 7 時：茨木ＩＣを出発。何度も来たことがあるマキノ、メタセコイヤの並木の中を通り過ぎ、これまた何度か登った赤坂山への道を右に取り、ちょっとで、白谷温泉の崩れかけた看板付近に車を止めた。地図では温泉、別荘、ペンション、と並んでいるが、過去の栄華の華やかな地図のはずがなにもなく、かつての夢のあとなのか、それこそ何もない山のふもとの草原、そういえば縦横に道があるぐらいの山の麓である。
◎黒川マキノ線という林道。ここからは、みなさん黒河峠から三国岳、赤坂山方面に行く人が多いそうだ。10M 下に 10M幅の急流が流れている。林道も荒れ大きくほげていたり崩れていたり車は通れない。風が冷たく手袋をはめているが、防寒具は脱いでいる。2 月の下旬だというのに雪解けの春の風が吹く、今年は雪が少ない、かすかに道端に残っているぐらいと。樹々はまだまだ葉がなく枝だけが天に向かっている。常緑樹の緑も濃くモノトーンに近い世界。
◎もう 10 年近く通っている富山の雪かきも、今年は中止になった。
◎9 時に歩き出し、1 時間ほどでトイレがある黒河峠、このあたりから上は 50 センチぐらいの雪が残っている、風が冷たいので靴が潜り込まない。そこを少し行った鉄塔の下で小休止。なんだか広々した台地、樹が刈り込まれただだっ広い大地に鉄塔がにょきり、焦げ茶色に塗られた鉄塔が立っている。電線は東西に流れている、もう一本も並行に流れている、この山は電線鉄塔だらけで迷ったときには都合がいい。大自然の中、人口のニョキニョキ鉄塔と電線は、不自然で景色は妨げられる。朝から曇り空、時々白い雪の地面におぼろげに影が映るが、すぐまた消えてしまう。今日は陰鬱な曇り空、モノトーンの山と思っていた。
◎二本目の鉄塔。靴が潜りだしたのでワカンを着けた、ワカンをつけるのは 2 年ぶりかな、足が潜りだすとなかなか進まない、オレの重さ、荷を加えて 80 キロ、ずぼりずぼり潜りだした。ザックからワカンを出して装着、見違えるほどの歩きやすさ、快適である。雪は 50 センチぐらいかな。まわりの山々もまばらに雪をかぶっている、岡鹿之助の絵の世界だね。
◎三本目の鉄塔、今までのものと形状が違う、鉄で三角形を組んだ梁が横に突き出し、電線は張ってあるが鉄塔は三本ぐらいしかない、次の塔がない、次の電線もない。塔の下に小屋、オレの勝手な想像だけれど、作業練習用の鉄塔かな。このあたりで急登が続き、土も見えだしたので、ワカンをはづす。
◎五本目の鉄塔、ちょうど 12 時、もう少し先かとも思ったが、ここで昼飯にする。今朝は 5 時過ぎに起床、にぎりめしを造り卵を焼いた。いつものパンを食べ、チャイを飲んだ。
◎ここは展望がいい、360 度とはいかないが三方向がまる見え、琵琶湖も駿河湾もすぐそこにある。琵琶湖は安曇川の三角州、手前に蛇谷が岳やら武奈ヶ岳が見える。駿河湾は大きな船も入ってくる大きな町、いずれまた美味い海鮮でも食いたいものだね。歩いてきたうしろの方は、高島トレイルの山々、三国岳に赤坂山と連なっている。この山は鉄塔が多い山だ、あちこちに立っているが、ほとんどが茶色に塗られているのに、一つだけ赤と白のツートンカラー、二つだけ、鉄塔の上部が黄色に塗られている、何かの約束事があるのだろう。
◎ワカンのつけ方、「ええとこっち向きで　ここに通して　次に」と久しぶりなので戸惑ってしまっている。昔から雪国の定番品、縄で足に縛って歩いていたものだろうけれど、今どきの山の店で売っているものはほとんどがアルミ製、装着のためのバンドも、アイゼンを止めるものと同じように細いバンドをスイスイ通していって最後に締める。

017　高島トレイル-Ⅱ　010319
◎そういえば、オレの持っている山の道具は、ほとんどが四半世紀前の品物、山の知識も四半世紀前の情報、今は、山の道具もそれぞれに進化していっているらしく、今どきそんなと笑われるかもしれない。最近は若い方々も山に登ってくる、服装も装備もなかなかに格好がいい。スマホの地図を見ながら歩いている。
◎陽はなかなか射し込んでこないねと思っていたが徐々に青空が現れだした。飯が終わり歩きはじめると空気の色が明るくなりだした、半分ぐらいだけれど青空も見えている、真っ白い雪がキラキラ輝く、雪目になるほどじゃ、雪で顔が焼けるほどじゃないけれど、久しぶりの雪の中の快晴になってきた。昔信州の山の中、ＧＷのころだと思うが太陽が照り付ける中一日行動をした。なんと顔が腫れ上がってしまった、翌日は情けない顔をして坑道を続けたのか、帰ったのか忘れてしまった。それ以降、日焼け止めクリームは離せないといつもザックに入れていたが、一年中河原を走るようになって、オレの顔も一年中黒い、一年中黒いと、たった一日の日焼けぐらい何ともなくなった。
◎またまた雪がでてきたのでワカンを装着。ワカン、昔は持ってなかった、信州の山ではほとんど必要がなかった。昔、故阪口さんが、北八ヶ岳に持参していた、それを借りて歩いてみたことがあった、「なんだ　楽しいおもちゃ」と思った。同じ日に、クロスカントリー用スキーを借り、白駒の池を一周した、これも楽しい思い出。関西の山は、「そらあ　ワカン　ですよ」と皆さんおっしゃるように、くつが潜る、体力が消耗する、時間がかかる、低い山の雪の中ではワカンは必需品、今日もこれをつけて歩くと、一歩一歩が雪を踏みしめ、歩き方も変わってくる、楽に歩けるのである。
◎芦原岳：840Ｍと書いてある、ここは並行に走っている鉄塔の敦賀寄りのもの、ポコリンと大きく広がる鞍部のてっぺん、日が照り雪が輝き、広々とした大地の上、気持ちがいい場所だ。前の方向こうの山にレーダーアンテナが見える、そこに向かって下っていく、ワカン装着のまま雪の斜面をふわりふわりだ。
◎すぐそこに見えた電波塔だが、山のかげに隠れて見えなくなる、けっこう遠いなと思いつつ、一歩一歩。
◎汗をかきながら電波塔までやってきた。ここはこの電波塔に来るための道やら駐車場があるらしいが、雪に覆われその姿が想像できない、ガードレールが見えたり、電信柱が並んでいたり、雪がなければ都会に近い里山なのかもしれない。一つは関西電力の電波塔、もう一つはどこのものかな。電波やレーダーの知識が全くないので、あの丸いお椀がどう作用するものやら、なにを運んでいるのやら、皆目わからない。
◎目的地の乗鞍岳はもう一つ向こうのポコリンだそうで、電波塔のそばにザックを置き空荷で向かう。またまたワカンのままふわりふわりと下の方へ、登り返しててっぺんを目指す、遠くに見えてもこの距離は近い、20分ぐらいですぐに到着した。雪に覆われ道はまったく見えない、おおよそここをまっすぐ下ればよし、登りは樹々が邪魔をして、右へ左へ枝をつかみ木を避けて登っていく。昔、鉄塔があったというコンクリートの建物、あとは雪に埋もれて何もない。下を見ると、雪の中に標識が顔を出している。乗鞍岳：865Ｍと書いてある。ますます琵琶湖がすぐそこに、竹生島が見える、下には国境スキー場が見える、大きな駐車場に何台か止まっているが、ゲレンデでスキー客が滑走しているさまは見えない。
◎3：30 さあ下りましょう、今日は予定通りに歩けた、完走できた、下りは林道だけれどショートカットしてその間を下れたらいいのですがと歩き出した。まずは歩き出すと古い足跡がある、この方もショートカットをしておられるとどんどん下った。途中で林道に出た。「あれれ　これはクマさんに　ちがいない」と足跡を発見。オレのこぶしぐらい、先が三つに割れ、爪のあとがくっきりついている、しばらくして山の方に消えている。「あれはクマに違いない」と思った。物知りの親爺が出てきて、「いやちがう・・」と講釈たれなさるのも聞きたくないし、ええい熊にしておこう。
◎斜面を下り、林道に出る、また斜面を下り、林道に出る。獣除けの網が張ってあるのを乗り越えたり、ロープを外して結びなおしたり、だんだん村に近づいてきた。さあ在原村に着いた、あとは1時間、車まで歩きましょうと歩く。振り返ると電波塔がすぐそこに見える、ここは鄙びた村、20,30 軒ぐらいの家が在るかな、廃屋もいくつかみられる。5：30 に車まで帰ってきた。家に帰り着いたのが8時過ぎだった。